

論文内容の要旨

報告番号		氏名	伊藤 高広
Correlation between the ABC classification and radiological findings for assessing gastric cancer risk 胃がんリスク評価におけるABC分類とX線所見の関連性について			

論文内容の要旨

背景・目的: 胃がん検診において、2014年の時点で唯一死亡率減少効果があると厚生労働省から認定されているのが胃X線検査である。一方で検体検査から胃がんリスクを予測して事後管理を層別化するABCリスク分類と呼称される検診法が普及しつつあるが、この方法には最もリスクが低いとされるA群の中に高リスク例が混入するなどの問題点がある。本研究ではABCリスク分類を導入する際に胃X線検査所見が相補的な役割を担えるか否かを検討する。

対象・方法: ABCリスク分類と胃X線検査を同時に行った318名の職域検診受診者を対象とした。A群はヘリコバクターピロリ菌(以下Hp)感染、萎縮度判定(ペプシノゲン検査;以下PG)が共に陰性、B群はHp陽性・PG陰性、C群はPG陽性と定義し、B,C群をnon-A群とした。過去の報告からA群の中でHp抗体価が3.0U/mL未満の群と高リスク群が混入しやすいとされる3.0U/mL以上の群を区別し、それぞれA-1、A-2群とした。2名の日本医学放射線学会診断専門医が合議の上でABC分類の結果を伏せて胃X線上の皺襞と胃小区について評価し、X線学的胃がんリスク判定とABC分類の結果を照合し、多変量解析を用いて分析を行った。

結果: 207名のA-1群と皺襞消失の5名を除いた93名のnon-A群について多変量解析を行った結果、胃X線所見のオッズ比は皺襞分布(背臥位像で胃体部の半分以下): 17.72, 皺襞幅(3.9mm以上): 10.63, 皺襞性状(辺縁不整): 6.10, 胃小区(粗糙): 10.62であり、これらのうち2因子以上を満たすものをX線学的胃がんリスクと規定すると感度90.3%, 特異度94.7%, 正診率93.3%となった。X線上はA-2群13名のうち9名(69.2%), A-1群207名のうち11名(5.3%)が2因子以上を満たし、胃がんリスクと判定された。

結論: ABC分類と胃X線所見はよく相関するが、乖離例が一定数存在する。リスクを考慮した胃がん検診においては両者を併用することが望ましいと考えられる。